

研究ノート

家政学広報におけるブックレット『家政学のじかん』の可能性 (第1報)

—読後の生活観・家政学観の変化—

表 真 美 (京都女子大学)
小 倉 育 代 (大阪女子短期大学)
大 本 久美子 (大阪教育大学)
岸 本 幸 臣 (羽衣国際大学)
長 石 啓 子 (元くらしき作陽大学)
花 輪 由 樹 (京都大学)
宮 崎 陽 子 (羽衣国際大学)
吉 井 美奈子 (武庫川女子大学)

原稿受付 平成25年2月28日；原稿受理 平成25年6月15日

The Usefulness of Book-let “Kaseigaku no Jikan” for the Publicity of Home Economics

: the Change of Consciousness about Life and Home Economics
after Reading the Book-let

Mami OMOTE*¹, Ikuyo OGURA*², Kumiko OHMOTO*³,
Yukiomi KISHIMOTO*⁴, Keiko NAGAISHI*⁵, Yuki HANAWA*⁶,
Yoko MIYAZAKI*⁴ and Minako YOSHII*⁷

*Kyoto Women's University**¹, *Osaka Women's Junior College**², *Osaka Kyoiku University**³,
*Hagoromo University of International studies**⁴, *Kurashiki Sakuyo University**⁵,
*Kyoto University**⁶, *Shoinhigashi College**⁷

(Received February 28, 2013; Accepted in received form June 15, 2013)

Keywords キーワード：book-let ブックレット, publicity 広報, home economics 家政学,
views about living 生活観

1. 研究の背景と目的

現代社会には多種多様の生活問題が山積している。次世代を担う若者の失業や非正規雇用, 子どものいじめや自殺など, 深刻な報道が後を絶たず, 日本社会全体が疲弊していると憂えざるを得ない。科学技術や情報化は進む一方であり, 一部にその進歩の歪みともいえる状況も生じている。真の豊かさが問われ, 生き方・暮ら

し方への考え方が揺らいでいる今, 家庭生活や家族について, あらためて問いなおす時期が来ているだろう。

家政学は, 今まで日本の社会が求めていた市場論理ではなく, 非効率的, 非経済的ながらも, 命を守り, 人間を守ることを優先し, 教育・研究を行ってきた¹⁾。家政学は, 家庭生活, 家族に関する研究を通して, 現在のわれわれの生き

表1 各章のテーマとリード文

<p>序章 生活するということ</p> <p>— 家庭生活のための社会の発展 —</p>	<p>4章 あなたの「今」を『ジェンダー』からみつめる</p> <p>— 「育(イク)メン」ってなに?家事分担 —</p>
<p>家政学を学ぶ学生に女子が多いことは、この学問の一つの特徴です。そのことは、家政学成立の歴史とも深く関わっていますが、同時に、人間にとって最も大切な日々の営みである家庭生活の捉え方に、私たちがこれまで大きな偏見や誤解を持っていたことも、深く関係しています。</p> <p>本章では、家政学とはどのような学問なのか、家政学の成り立ちを振り返りながら、家政学の領域科学を構成する際の考え方や視点を整理してみます。そして、家政学と他の諸科学とはどのような繋がりを持っているのか、科学の発生の原点から考えてみたいと思います。</p> <p>その上で、私たち人間の家庭生活を、より豊かに安定的に持続させるために、家政学は何をすることが問われる学問なのか、「家政学の今」を、私たち自身の家庭生活を基に考えてみましょう。</p>	<p>子どもには必ずお父さんとお母さんがいます。それなのに男性の育休取得率は1.72%(女性85.6%、2009年度雇用均等基本調査結果概要)です。なぜでしょう?一緒に考えてみませんか?今、家政学からの社会貢献として模索されている家族生活教育の中に、ジェンダー平等及び性教育が含まれようとしています。生まれた子どもを育てる力が求められています。</p> <p>この章では、ジェンダーの視点から、育児・家事の分担</p>
<p>1章 あなたの「今」を『家族』からみつめる</p> <p>— あなたにとって家族とは? —</p>	<p>5章 あなたの「今」を『地域(コミュニティ)』からみつめる</p> <p>— 「こどものまち」ってなに?「思いやり」のまちづくり —</p>
<p>お父さん、お母さんがいて子どもがいる、それだけが家族ではありません。社会の変化にともなって、家族は多様化しています。夫婦や親子の関係も複雑です。変わらないのは、子どもを社会の一員として育て上げることが家族の大切な役割だということ。でも、子どもを産むか産まないかも、今は個人の選択の自由です。</p> <p>あなたはどんな家族が理想ですか?この章を読むことをきっかけに、自分自身の家族について考えてみてください。</p>	<p>「思いは見えないけれど、思いやりは形に見える」。これはCMで流れていた言葉です。「思い」を行動にかえていくことは、まちづくりの第1歩です。</p> <p>この章では、子どもがまちをつくるという一風変わった仕組みをもつ「こどものまち」を紹介します。</p> <p>子どものまちづくりへの「思い」を形にしていこうということ。現実社会にはない仕組みをエンターテイメントでつくりだすということ。</p> <p>今後の地域づくりに、「こどものまち」がどのようなヒントをくれるでしょうか。私たちの生活を生みだすよりよい地域づくりのあり方を、一緒に考えてみましょう。</p>
<p>2章 あなたの「今」を『親子関係』からみつめる</p> <p>— 子育てはつらい?思春期の親子の人間関係 —</p>	<p>6章 あなたの「今」を『住まい』からみつめる</p> <p>— 人間らしい暮らしを問い続けよう —</p>
<p>あなたは結婚願望がありますか? 子どもを産みたいと思いますか?子育ては楽しみですか?そしてあなたは今まで、親とどのようなかわり方をしてきましたか?</p> <p>家庭生活の合理化・簡便化が進み、「子育て」も効率主義的な発想や、親の都合が優先されたりしていませんか。</p> <p>競争社会や学歴偏重社会の中で、親はわが子に無意識のうちに優秀な成績を求めたりしていませんか。</p> <p>この章では、「人間関係を生活とともに築く」ことができる家族のあり方を思春期の親子関係に焦点を当てて考えてみましょう。</p>	<p>「住まいとはどんなもの?」と問われたら、「屋根や壁があって風雨寒暑から身を守る場所」「生活をする所」などと、私たちは比較的悩むことなく答えられそうです。では、「人間が生きてとは、生活するとはどういうこと?」と問われたらどうでしょう。おそらく深く考え込むことになりそうですね。でも、これらの問いは全く別のものではなく、本来、「住まいとは?」「生きているとは?」を考えることではないでしょうか。</p> <p>この章では、2つの問いを結びつけながら住まいや住環境をみつめてゆく視点、「家政学における住居学」の視点にたつて、私たちの住生活の在り方をともに考えていきましょう。</p>
<p>3章 あなたの「今」を『制度』からみつめる</p> <p>— 結婚ってなに?夫婦別姓からみる結婚のカタチ —</p>	<p>7章 あなたの「今」を『加齢』からみつめる</p> <p>— 歳をとると食事はどうなる?Co-食のすすめ —</p>
<p>「結婚する」というと、どんなことをイメージしますか?大好きな人と一緒に住むこと?結婚式を挙げること?披露宴をすること?子どもを産むこと?・・・人によって様々な答えがあるかもしれません。しかし、一番多く想像されるのは「結婚届を出す」ではないでしょうか?</p> <p>この章では、「夫婦別姓」をキーワードにして、「結婚」とは何か、「婚姻(結婚)」にかかわる法律「民法」、その制度について考えてみましょう。</p>	<p>長寿国日本、2050年には65歳以上が総人口の4割を占める¹⁾そうです。どんな社会が待っているのでしょうか。と、世の中任せにしていってよいでしょうか。住み慣れた地域で、あるいはより快適な場所で、それぞれが安心して生活したいものです。それには、「その歳になってみないと分からない」と思っていることと向き合ってみることが必要でしょう。長い生涯の1コマとして「今」を見つめると、いろんな課題も見えてきます。</p> <p>食事は、生きてゆくために欠くことのできない行為です。この章では、「食べる」ことから「加齢(老いる)」生活とそれをとりまく環境を見つめてみましょう。</p>

方、暮らし方の見直しにヒントを与えることができるのではないだろうか。にもかかわらず、家政学についての正しい教育・研究内容が広く一般に知られることはなく、家政学に対し、間違ったとらえ方をしている者も少なくないと考えられる。

われわれはこれまで、家政学、家政学原論の現状を、多面的に調査研究してきた。まず、近畿圏253の普通科のある国公立高校の家庭科教員を対象に、郵送法で質問紙調査を実施し、80校から有効回答を得て分析した結果、家政学が家庭科の背景学問として意識されているとはいえないことがわかった。また、家政学研究の教育的反映についての評価が低く、これは家政学原論や家政学を学ぶ機会が減少していることが原因として考えられること、さらに、家政学を学んでいる教員の方が、家庭科の教科特性を理解していることが明らかになった²⁾。そこで、国公立大の教員養成課程における家政学原論の開講状況について調査したところ、48校中5校しか開講していないことが判明した³⁾。家庭科教育は、家政学の研究成果を教育を通して人々の実生活に普及する好機ではあるが、家庭科教育における家政学の位置づけが、あいまいになってきていることが示唆される。

そこでわれわれは、家政学の重要性を高校生や学生、さらに一般に広めるひとつの方策として、ブックレット『家政学のじかん』を発行した。本報告は、その『家政学のじかん』の家政学広報における可能性を、大学生への質問紙調査により明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) ブックレット『家政学のじかん』の概要

『家政学のじかん』は、A5版、総ページ数96ページの冊子である。タイトルは冊子を読むことにより家政学に接する「時間」をつくるという意味を込めており、堅苦しさを払しょくするためにひらがなの「じかん」とした。家政学にふれたことのない読者にわかりやすく家政学の重要性を伝えるために、以下の9点を執筆・編集の原則とした。①序章に家政学についての

章を設ける、②生活問題について平易な言葉で解説する、③親しみやすい挿絵を入れる、④各章の最初のページにリード文を設ける、⑤出来る限り家政学の知見を含ませ、参考文献にあげる、⑥章の総括として「今こそ家政学！」と題した節を設け、テーマと家政学との関連をのべる。⑦章ごとに「さらに学びたい人へ」として家政学に関連する推薦図書をあげる、⑧節を多く設けて読みやすくし、節見出しは疑問形にしてそれに答える形式をとる、そして⑨第1章から、第7章まで、読者の身近な問題としてとらえてもらうため、「あなたの今を〇〇からみつめる」という章タイトルにそろえ、どの章からでも読めるようにする。

つぎに、『家政学のじかん』の内容を紹介する。序章には、「生活するということ」というタイトルで、生活、家政学についてまとめた。1章から7章までは、家族、親子関係、制度、ジェンダー、地域、住まい、食と加齢について取り上げた。表1に各章の副題と概要を示すリード文を示した。

(2) 質問紙調査の方法

『家政学のじかん』の家政学広報への効果について検証することを目的として読後調査を実施した。調査の概要は以下のとおりである。関東、関西、中国地区の6大学における家庭科教育法、家政学系科目（家政学原論・生活科学原論・家族関係論）、栄養教諭関連科目の副読本とし、授業時間外に目を通すことを課題とした。2011年10～12月に受講生を対象として各々の授業時間内に集合法により自記式質問紙調査を行った。調査内容は、①最も興味を持った章とその理由、②読後の生活観の変化、③読後の感想、④家政学の認知、⑤家政学への興味、⑥家政学のイメージ、⑦家政学の役立ち感である。分析対象は、401票、そのうち女子378名・男子12名（不明・無回答11名）、1・2・3・4回生は各々21.7、44.6、13.0、17.5（不明・無回答3.2）%だった。各大学、受講科目別の対象者数は表2に示した。なお、A大学家族関係論受講生とE大学は家政学部、B・D・E大学は生活科学系学部、C大学は食文化学部、F大学は

表2 対象者の人数

科目	A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	F大学	計
家庭科教育法	178		27	4		10	219
家族関係論	31						31
生活科学概論		64					64
家政学原論					17		17
栄養教諭			51				51
管理栄養士				19			19
計	209	64	78	23	17	10	401

3. 研究結果および考察

(1) 最も興味を持った章とその理由

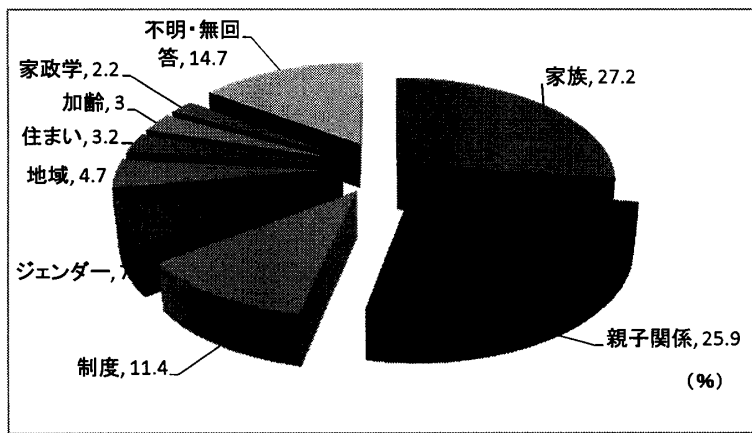


図1 最も興味を持った章

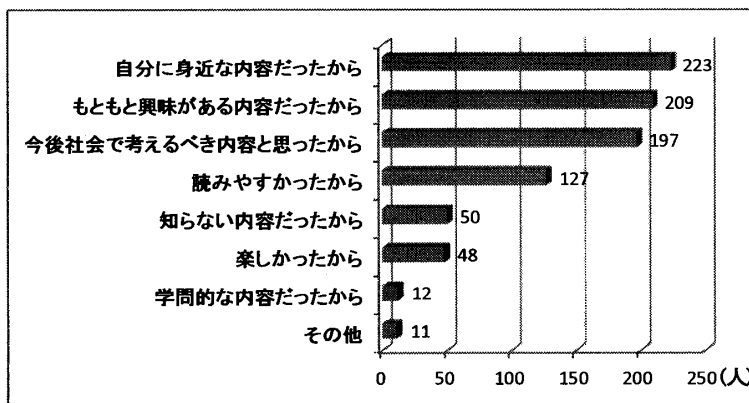


図2 興味を持った理由

社会学系学部、およびA大学の家庭科教育法受講者は家政学部以外の複数の学部にも所属する受講生である。

最も興味を持った章について尋ねたところ、「家族」が27.2%で最も多く、次に「親子関係」で25.9%、続いて「制度」「ジェンダー」「地域」「住まい」「加齢」の順となった(図1)。

興味を持った理由を複数回答で尋ねたところ、

「自分に身近な内容だったから」「もともと興味がある内容だったから」「今後社会で考えるべき内容と思ったから」「読みやすかったから」の順で多かった(図2)。家族(1章)、親子関係(2章)に最も興味を持った学生は、上位4つの理由を選ぶ者が多かった。「知らない内容だったから」を選んだ45名は、制度(3章)、住まい(6章)に最も興味を持ったと回答した者が多く、各々18名、9名であった。

前述のように、章タイトルの形式をそろえ、どの章からでも読めるように工夫したが、目をとおした章は、序章を除くと収録が後になるにつれて低くなる傾向があった(序章69.1%、1章83.5%、2章80%、3章62.1%、4章62.6%、5章51.6%、6章50.6%、7章48.1%)。家族、親子関係は、身近な内容、読みやすさに加え、冊子の前半部分に収録されていたために、読んだ学生が多いことが、最も興味を持ったと多くが回答した要因の一つと考えられる。読み手に多くの情報を与えるためには、今後このような点を考慮に入れ、収録順を考える必要があることが示唆された。

(2) 読後の生活観の変化

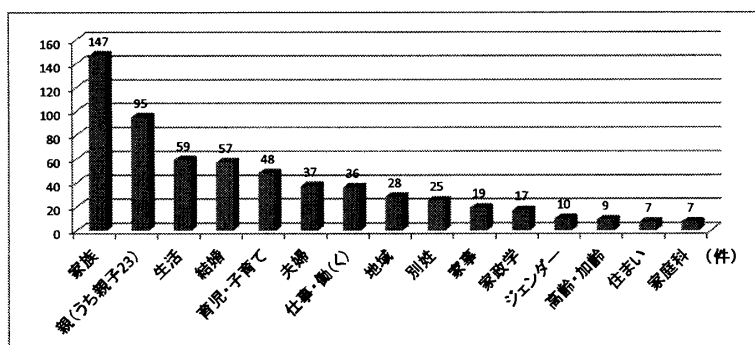


図3 「生活に対する考え方」や生活に変化があったと答えた学生の自由記述に含まれていたキーワード

つぎに、『家政学のじかん』を読んで、「生活に対する考え方」や生活に変化がありましたか、との質問には、「変化があった（「変化がありそう」も含む）」と回答した学生が280名（69.8%）、特に変化がなかったのは113名（28.2%）不明・無回答8名（2%）であった。

変化があった者に、具体的な変化の内容を自由記述で問うたところ、280名全員が記述を行った。自由記述の傾向を分析するために、各章のテーマに加え、章の内容を端的にあらわす語を15ワード設定した。序章は「家政学」「家庭科」「生活」、1章「家族」、2章「親」、3章「結婚」「夫婦」「別姓」、4章「子育て・育児」「ジェンダー」「仕事・働(く)」「家事」、5章「地域」、6章「住まい」、7章「高齢・加齢」である。これらの15ワードでキーワード検索した結果、各々図3に示す件数となった。

最も出現数が高かったキーワードは「家族」で、「家族の大切さに気付いた。家族関係をしっかり築こうと思った。（A大学家庭科教育法受講・2回生）」といった内容であった。次に多かった「親」に関しては、「私の両親は共働きで、小さな頃から悩みや相談は姉妹や友達にしていた。上手く親に頼ることが出来ないことでジレンマを感じたこともあったが、この本を読んで子育ての難しさを客観的に捉えることができた。私は実家生で就職しても実家から通おうと思っている。このチャンスを生かして家族で豊かな関係を育む姿勢を持ち続けたいと思った。（B大学生生活科学概論受講・4回生）」といった

内容であった。このように、「家族」と「親」のキーワードを含む記述では、自身の現在の生活や家族に対する見方や態度を見直した、との内容が多かった。

「結婚」に関しては、夫婦別姓、子育てと仕事、家事分担などを含み、ジェンダーに関する記述が多くみられた。

「結婚なんてまだ先の話だと思っていたが、夫婦別姓の問題について

読んで、姓を変えることの意味の大きさを知り、自分の前に素敵な人が現れて、いざ結婚となる前にもう少し結婚の法律上の問題について知っておいてもいいのではないかと思うようになった。（A大学家庭科教育法受講生・2回生）「結婚する相手に求める条件として、く家事、育児を手伝う」というのを付け加えようと思った。（C大学栄養教諭科目受講・1回生）」といった内容である。このように、将来的な生活設計について、今までの考えを改めた、という記述が目立った。

また、「この本を読むまで、結婚して子どもが産まれたら仕事を辞めようと思っていた。実際私の周りの家族を見ると、仕事を辞めている人が多かったからだ。しかし、この本を読んで、母親も仕事をしながら生活していくためにはどうすればいいか（育メン、地域、住まい、親子のあり方）などを知ることができた。これからは10年、20年後のことを考えて仕事を探そうと思う。（B大学生生活科学概論受講・4回生）」のように、出産を機に仕事を辞めよう、あるいは家事は女性である自身が行うべきと考えていた学生も少なくないことが記述からうかがえた。読後に、自身のもつ固定的な性別役割分業観を変化させた学生も多くみられた。

さらに、「結婚や出産について今はまだ深く考えていないが、この本を読んで将来自分はどうのような道を選んで生きていくのか、社会の変化に常に敏感になりながら早め早めに自分のライフスタイルについての考えを固めていく必要があると思った。（A大学家庭科教育法受講・

2回生)」といった内容もみられた。このように、これからの生活を主体的・積極的に考え、行動するきっかけになったことがうかがえる。

「家政学」についての記述は、大学の専攻・受講科目に偏りなく17件みられた。以下に代表的な6例を示す。「家政学はこれからの社会を支え、大きく変える可能性を持っている学問分野であると考えようになった。自分の生活での家庭、家族のウエイトが大きくなった。(A大学家庭科教育法受講・2回生)」 「自分の生活を見直すきっかけになった。家政学という学問がどれだけ私たちの生活に根強く関係しているか再確認できた。(A大学家庭科教育法受講・2回生)」 「学ぶ前は家政学ってどういうものだろうと考えていたが、学問の中で一番身近にあるものと思った。当たり前のように生活していく中でもっと深く考えて生活すれば、更なる充実した日々を過ごせるということに気づいた。(B大学生生活科学概論受講・4回生)」 「〈新しい社会発展には家庭生活に基盤を持つ家政学が大切〉と知り、普段の何気ない生活の中に意味を考えるようになった。(B大学生生活科学概論受講・4回生)」 「社会を支える立場になったとき、家政学は人間が生活していく中で必ず必要な学問なので、しっかり勉強し、将来に役立てたい。(C大学栄養教諭科目受講・1回生)」 「1章(家族)を読んで、改めて家族について考え、今自分が思う家族を大切にしようと感じました。家政学について名前程度しか知らなかったので具体的な家政学の内容について知ることができ、とても興味深い学問だと感じました。(D大学管理栄養士科目受講・3回生)」 いずれ

の記述も、生活と密着した学問である「家政学」の大切さに気づき、今後の生活に生かしたいという内容であった。尚、読後に感じた「家政学のイメージ」について自由記述で尋ねた結果に関しては、第2報で詳細を報告する。

「家庭科」について記述した学生は7名であった。「改めて、現代の社会において家族生活を行う際、さまざまな問題につき当たるということを感じ、自分がこのような問題に〈家庭科〉という教科を通じて児童に何かしらの生きていくためのヒントを与えることができるのではないかと考えるようになった。(A大学家庭科教育法受講・2回生)」 「家庭科で学ぶべき内容はたくさんあると思った。身近な疑問や問題点に目を向けていこうと思う。家庭科の重要性について気付くことが出来ました。(A大学家庭科教育法受講・2回生)」 といった記述が多かった。「家庭科」について述べた学生の多くは小学校家庭科教育法の受講者であり、家庭科の教科としての重要性を再認識するきっかけとなっていた。

以上、「生活に対する考え方や生活に変化があった」と回答した280名の学生にとって、『家政学のじかん』は、自身の生活を見直し、積極的に暮らしをつくる、また、将来の生活に関する見方を変えるきっかけとなったことがわかる。さらに、そのような生活の営みに、「家政学」や「家庭科」が役に立つことを複数の学生が認識するに至ったことを自由記述より読みとることができた。

(3) 家政学の認知・関心と読後の家政学への関心の変化

表3 家政学の認知と興味・関心・読後の変化

◆この本を読む前から「家政学」という学問を知っていましたか					人 (%)
知っていた	ある程度知っていた	あまり知らなかった	知らなかった	不明・無回答	
7 (1.7)	119 (29.7)	197 (49.1)	74 (18.5)	4 (1)	
◆この本を読む前から「家政学」についての興味・関心はありましたか					人 (%)
大変あった	ある程度はあった	あまりなかった	全くなかった	不明・無回答	
34 (8.5)	209 (52.1)	118 (29.4)	35 (8.7)	5 (1.2)	
◆この本を読んだから「家政学」についての興味・関心は変化しましたか					人 (%)
とても興味・関心が増した	ある程度興味・関心が増した	変化していない	興味・関心が減じた	不明・無回答	
78 (19.5)	287 (71.6)	30 (7.5)	1 (0.2)	5 (1.2)	

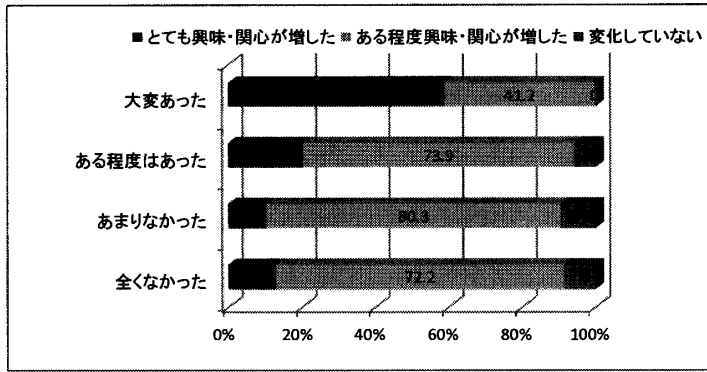


図4 興味・関心の有無別、読後の変化 (P=0)

家政学の認知・関心と読後の家政学への関心の変化について、表3に結果を示した。家政学の認知に関しては、「この本を読む前から家政学という学問を知っていましたか」という問いに対して、7割近くが、「あまり知らなかった」「知らなかった」と回答している。家政学部に所属する学生3名、生活科学系学部所属する学生6名が「家政学」を「知らなかった」と答えている。また、「あまり知らなかった」と回答した中には、家政学部の学生22名、生活科学部・生活環境学部の学生31名が含まれていた。学年の早い時期から「家政学」について、より解りやすく学生に伝える必要性が示唆された。

一方、興味・関心に関しては、「この本を読む前から家政学についての興味・関心はありましたか」という問いに対して、「ある程度はあった」を合計すると約6割が家政学に興味・関心があったと答えている。一方で、家政学に「全く興味・関心がなかった」と「あまりなかった」と答えた学生は残りの約4割を占めている。家政学に関連のある科目の受講生を対象とした結果としては大きな課題といえよう。興味・関心が「全くなかった」と答えた35名は、教育系学部・社会系学部において小学校家庭科教育法を受講する17名、食文化学部において中・高等学校家庭科教育法を受講する5名、栄養教諭科目を受講する11名、不明・無回答2名であった。前述の家政学を「知らなかった」との回答者も類似した傾向を示しており、

回答者のうち、小学校家庭科教育法受講者66%、栄養教諭科目受講者22%であった。小学校家庭科、栄養学各々に家政学をいかに位置づけるのかを明確にする必要性が示唆された。

この本を読んでから「家政学」についての興味・関心は変化しましたか、の質問には「とても増した」「ある程度増した」を合わせて91.1%に達し、『家政学のじかん』の家政学広報における有効性が示された

といえる。さらに、読む前の興味・関心と「家政学」への興味・関心の変化のカイ二乗検定によるクロス集計分析を行ったところ、危険率0で有意な差が認められた(図4)。読む前から興味・関心があった方が「とても読後興味・関心が増した」と回答する割合が高い。しかし、全く興味・関心がなかった者も約1割がとても増した、約7割がある程度増したと回答しており、『家政学のじかん』の家政学広報への効果が認められたと判断できるであろう。

(4) 家政学の役立ち感

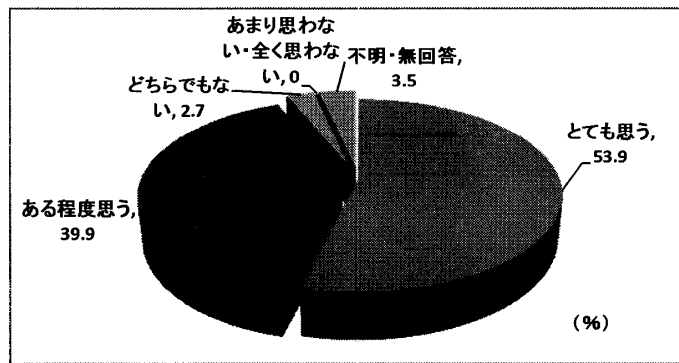


図5 「家政学」はあなたの生活に役立つと思いますか?への回答

家政学の役立ち感についての結果は図5に示している。「家政学」はあなたの生活に役立つと思いますか、との問いに「あまり思わない」「思わない」の回答はなく、半数以上が「とても思う」と回答した。「ある程度思う」も約4割にのぼり、家政学が役立つと思う学生は93.4%に達した。最後の質問であり、誘導的な問いかけであることは否めない。しかし、各章の最終節に「今こそ家政学!」として、各課題にお

ける家政学の有用性を示したことが、結果につながったと考えられる。

4. まとめと今後の課題

家政学に関する序章および家族の生活課題をとりあげた7章からなるブックレット『家政学のじかん』の家政学広報における効果について知ることを目的に、大学生を対象とした質問紙調査を行った。その結果は以下の3点にまとめることができる。1) 約7割の学生が読後に生活に対する考え方・生活が変化したと回答した。具体的変化を問うた自由記述からは、『家政学のじかん』を読むことで、自身の生活を見直し積極的に暮らしをつくる、また、将来の生活に関する見方を変えるきっかけとなったことが読み取れた。さらに、そのような生活の営みに、「家政学」が役に立つことを複数の学生が認識していた。2) 読後に「家政学」についての興味・関心が「とても増した」「ある程度増した」を合わせた回答は91.1%に達し、『家政学のじかん』の家政学広報における有効性が示された。全く興味・関心がなかった者も約1割が「とても増した」、約7割が「ある程度増した」と回答していた。3) 小学校家庭科教育法、栄養学科目受講者は、家政学に関する認知が低く、興味・関心がうすいことが浮き彫りとなった。

読後に生活観が変化した者が記述した「具体的な変化の内容」について、本報告ではキーワード別に傾向を紹介することにとどまったが、今後、さらに分類・分析して示唆を得たい。また、本調査の対象者は94.3%が女子学生であり、今後は男子学生を対象として『家政学のじかん』を用いた家政学広報、読後調査を行いたい。さらに、高校生、一般の人への広報の可能性も明らかにすることが今後の課題である。現在、高等学校の家庭科教諭にブックレットを送付し、読後の質問紙調査を行っている。今回のブックレットには、家政学の重要な領域の一つである被服分野が含まれていなかった。共通のコンセンサスを得ることが容易な執筆メンバーのなかに、衣生活を専門とする者がいなかったためである。そこで既に、被服分野を内容に含み、一

般に流通する家政学読物本を出版社より出版した⁴⁾。さらに、安価で手に取りやすく、より多くの生活課題をとりあげた同様のブックレット『家政学のじかん2時間目、3時間目』を今後作成し、家政学広報の可能性を探りたい。

文 献

- 1) 吉田敦彦 (2009) 「ホリスティック教育の基礎的視点」, 住田和子 (編著) 『改訂 生活と教育をつなぐ人間学』 開隆堂 p.76-77
- 2) 小倉育代ほか (2009) 「家庭科教員の家政学認識と教育現場の課題」 『家政学原論研究』 43号 p.30-38
- 3) 大本久美子ほか (2010) 「家庭科教員養成課程における「家政学原論」関連科目の開講の有無と授業内容の検討: 国公立大学(4年制)のシラバス調査より」 『家政学原論研究』 44号, p.14-22
- 4) 『家政学のじかん』 編集委員会編 (2012) 『今こそ家政学 暮らしを創る11のヒント』 ナカニシヤ出版